

原 著

## 主免実習前の3年次生の実践的指導力の基礎

### 一 「教育実習基礎研究」後の意識調査を中心に一

黒崎東洋郎(岡山大学教育学部教育実践総合センター)

開かれた学校づくりが推奨される中、学校の主体性、自立性が求められ、特色ある学校づくりが推進されている。こうした流れの中にあつて、養成段階から学校現場のニーズに応じた実践的指導力の基礎を育成することが重視されている。本研究では、学校現場のニーズに応じた実践的指導力の基礎を、学校現場(本学部附属小学校)をフィールドにして培う3年次学生を対象にして、彼らの実践的指導力の基礎に関する意識について分析する。教育実習基礎研究では、実践的指導力の中でも授業実践力に重点を置き、附属及び公立校の授業をライブで観察するストラテジーをとるなどして、学生の授業観を基礎を培い、主免実習に円滑に橋渡しできるようにしている。この教育実習基礎研究での取り組みで、どの程度学生の実践的指導力に関する意識が高まったかを考察する。

キーワード：実践的指導力、実践的授業力、教育実習基礎研究、授業観察、授業観

#### I. 実践的指導力の基礎を育成する教育実習カリキュラム

変化の激しい時代にあつて、学校現場の抱える課題は複雑化、多様化してきている。こうした学校現場の課題に対応できるようにするためには、教育のエスノグラフィーを学生に形成できるようなシステムの構築が不可欠である。岡山大学教育学部では、1年次から学校現場を体験し、学校現場において、学生自身が主体的に子どもや現場教師に関わり、自ら教員に一番必要な実践的指導力の基礎を学ぶことができるように、積み上げ方式の教育実習カリキュラムにしている。

優れた教員になるためには、教科や教職に関する専門性を高めることが大切であるが、それ以上に大切なのは実践的指導力であると言われるようになってきた。例えば、優れた数学の教員になるためには、数学の専門を高めただけでは不十分である。また、教育方法や学習心理等の教職に関する専門性を高めるだけでも不十分である。教科や教職に関する専門性を発揮して実際に子どもに指導する実践的指導力が何よりも不可欠なのである。

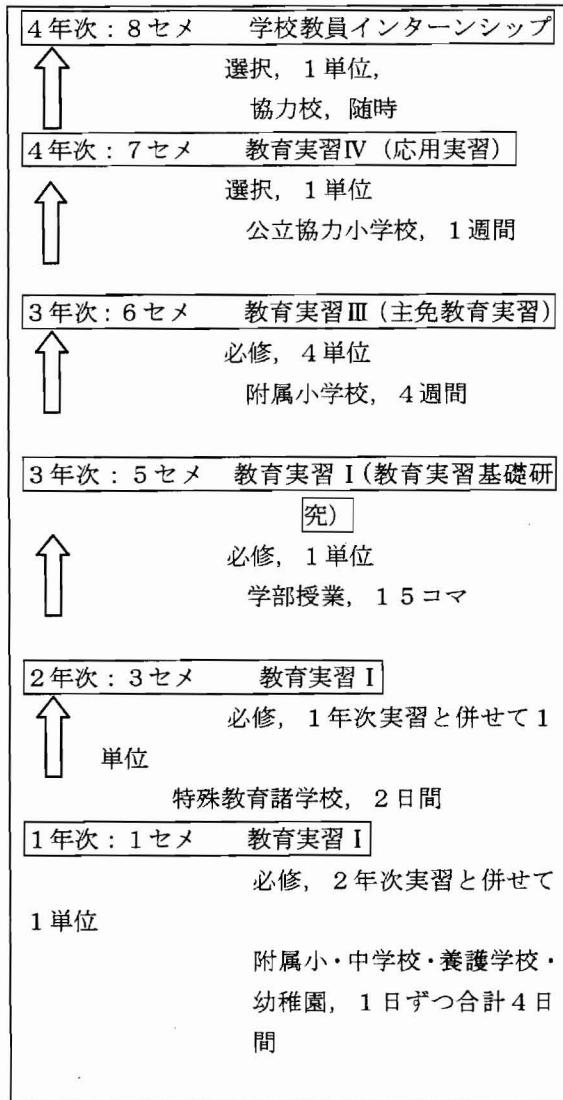
「実践的指導力とは、何か」という明確な定義されていないようである。実践的指導力と言う用語は、昭46年の教育職員養成審議会の答申に初めて登場している。1997年の教育職員養成審議会第1次答

申に、採用段階から教科や学級を担当しつつ、教科指導や生徒指導ができる実践的指導力が教員として最小限必要な資質能力として強調され、今や教師教育の最重要課題となっている。実践的指導力の基礎の形成を図るためには、専門性と教育実践の融合が重要であり、学校現場を中核にしたフィールド研究の場を用意する必要がある。従前(平成6年度まで)は、教科や教職に関する専門性を身につけてから教育実践するという教師教育がなされていた。ところが、「教師になろうと思って教育学部に入学したけれど、3年次に教育実習に行く頃には、教職への意欲が薄れてしまった」という学生の声があつた。本学部ではこうした学生の声を起爆剤にして、高旗正人、羽原貞夫、伊丹俊之等が中心となつて、入学当初の1年次段階から教育実習を実施することにした。その意図は次の通りである。

- ① 学生の教職への意欲を喚起するため。
- ② 高校まで教えてもらう学び手であった学生に、学び手から指導者への意識の転換を図るため。
- ③ 学校現場体験で自分が教師になるための課題をつかみ、解決のための理論を大学で学び、また学校現場で教育実践し、スパイラル方式で実践的指導力の基礎を育成するため。

積み上げ方式を始めた当初は、①、②に重点が置かれていたが、今では③に重点が置かれ、教職希望学生が教師に必要な実践的な指導力の基礎を主体的に学ぶことができるように工夫・改善されてきている。

図-1 教育実習カリキュラム

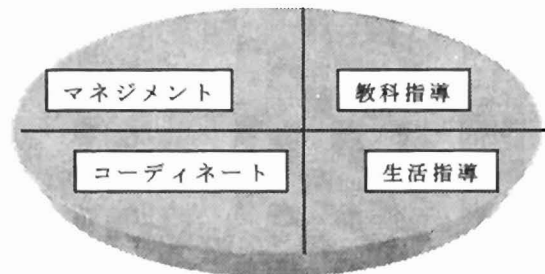


## Ⅱ. 教育実習で身に付けさせたい実践的指導力の基礎

今、教員にミニマムエッセンシャルな資質能力として実践的指導力が脚光浴びている。実践的指導力については明確な定義がなされていない。しかしながら、「生きる力」<sup>2)</sup>を育成するために必要な教員の資質・能力であり、理論と実践が融合した資質・能力であるといえる。

岡山大学では、こうした実践的指導力を次の4つの力の総合体であると定義している。

図-2 実践的指導力



教育実習はこれら4つの実践的指導力の基礎を育成する中核的な科目である。各段階の教育実習でどんな実践的指導力を育成するのか検討を要する。1年次からの教育実習カリキュラムでは、次のような実践的指導力の基礎を育成することを構想している。

図-3 教育実習で身に付ける実践的指導力の基礎

年次	実習の型	実践的指導力
4年次	①学校教員インターンシップ	・4つの実践的指導力の基礎の総合
	②応用実習	◎教科指導力 ・生徒指導力，マネジメント力
3年次	①主免実習	◎教科指導力 ・生活指導力
	②基礎研究	◎教科指導力 ・生活指導力
2年次	特殊教育諸学校観察参加	・子ども理解のためのマネジメント力
1年次	附属4校園観察参加	・子ども理解のためのマネジメント力

## Ⅲ. 教育実習基礎研究の工夫・改善

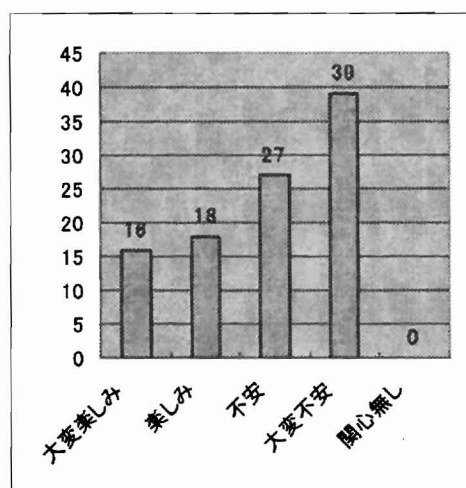
### 1. 附属・学校現場との連携

教育実習基礎研究は、3年前期、5セメ、15回の教育実習事前指導としての学部授業である。日本教育大学協会教育実習共同研究プロジェクト（岡山大学、東京学芸大学、鳴門教育大学、2003）、「教育実習・介護等の体験に関する調査報告書」<sup>3)</sup>によれば、事前指導を大学によっては、数時間、数回のオリエンテーションを実施して、主免実習の「心構え」を講義してこれに充てている大学・学部もある。3年次の教育実習事前指導の目的は、主免実習を大きな支障を生じることなく実践出来る最小限の力を包括的、一般的に身に付けることである。教育実習の「心構え」だけを講義して済ませる時代では無く

なっていると思われる。

本学部では、主免教育実習の重点を授業実習に置いている。教育職員養成審議会の第1次答申（1997）では、教育実習の問題点を「授業実習に偏重している」と指摘している。勿論、指摘された問題点を熟知した上で、授業実習に特化して主免実習を行っている。OECDのPISA報告（2003）やIEAのTHIMS報告（2003）等で、日本の子どもの学力低下が危惧されている。子ども達の学力低下は、将来の日本の国力の低下に発展しかねないのである。このことから、確かな学力を育成するため、養成段階から実践的授業力の基礎を育成することが大切である。主免実習は実践的授業力の基礎を育成する中核的場であり、実践的指導力の基礎を育成することは主免実習の最大の課題である。授業実習偏重は改善されなければならないが、主免実習では授業実習を重視し、実践的な授業力の基礎を育成することを重視することはいつの時代になっても変わらないと思われる。

グラフー1 学生の授業実践への関心



学生の授業実践への関心に関する様相はグラフー1の通りである。主免教育実習での教壇授業への関心は高い。「大変楽しみ」「楽しみ」の合計34%よりも「不安」「大変不安」の方が合計66%と大幅に多い。教壇授業体験が皆無の学生の授業実践への不安を払拭することも教育実習基礎研究では大切なことである。

附属小学校教員は、特に得意分野を教科指導にもつ個性豊かな授業力に優れた教員が多く、授業研究に意欲的である。こうした指導教員の下で、教育実

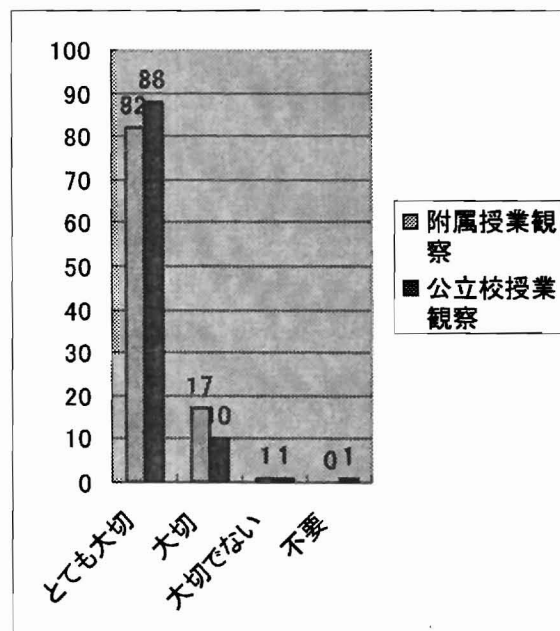
習生は、主免実習で確かな実践的授業力の基礎を身に付けるものとする。

そこで、より実践的授業力を効果的に身に付けさせるために、附属と連携して、教育実習基礎研究では附属教員の授業を2回ライブで観察・参加するプログラムを準備している。VTRを活用したバーチャル授業も考えられるが、編集者の意図が介在する。学生の主体的な実践的な授業力の形成のためには、ライブの方がよいと判断している。学生もバーチャル授業よりも授業の臨場感、真実感で優れるライブを希望する。

2回の内訳は、1回目は問題解決型の授業の流れを把握することであり、2回目は問題解決型の指導方法を理解することである。

「選ばれた子どもが附属だから授業がうまく実践出来る」と思う学生がいる。附属の授業を一般化するためにも、授業実践に関する「不安感」を解消するためにも、附属の授業観察だけではなく、公立校の授業実践を観察するのがよいと思われる。学校現場と連携して公立校の授業も「観察・参加」させることは不可欠であると考えている。

グラフー2 学生の目から見た附属・公立校の授業観察の有用性



グラフー2の通り、ライブで附属の授業を観察する有用性は、学生の事後の意識としては「とても大切（82%）」「大切（17%）」で合計99%である。附属と学部とは交通のアクセスは余りよくない。授業観察に附属まで行くには自転車でも30分程度かか

る。それでも附属でライブの授業を観察することに意義を見出すことは学生の授業実践への不安感の解消に役立っていると思われる。附属の授業観察後、公立校での「個に応じた授業実践」の観察を教育実習基礎研究に組み込んでいる。附属の子どもは入試で選抜された子どもでもある。公立校の子どもは附属の子どもと違って個性差や能力差が一般的に大きい。そこで、公立校の授業実践を観察するプログラムにしている。公立校の授業参観の有用性は、学生の意識として「とても大切（88%）」「大切（10%）」で、合計98%である。「とても大切」が附属の授業観察より上回っているのが特筆すべきことであると思われる。

教育実習基礎研究で学校現場の授業をライブで観察することは、主免実習直前の学生に実践的指導力の基礎を育成する上で有用であると考えられる。

## 2. 学習指導案と授業実践の一体化

実践的授業力の基礎を育成するためには、まず、授業を観る目を培うことである。授業を単に漠然と観ただけでは授業観は培うことができない。授業を観察するためには、

- ・ 指導者による授業説明
- ・ 学習指導案

が必要である。

### ① 授業説明

学生を授業公開のある教室に引率して、授業観察させようとしても無理である。授業実践の体験のない学生には、これからどんな授業がなされるのか皆目見当が付かない。授業は思いつきで実施するものではなく計画的、意図的に実践されるものである。そこで、授業観察に先立って授業説明を実施している。

一般に授業説明は、附属や公立校の指導者（授業者）が①授業のねらい、②授業の見所（学習活動とねらいを達成する姿）、③指導方法等を簡潔・明瞭に解説する。口頭で授業説明する教員もいれば、丁寧に絵、図を使って授業説明をする教員もいる。こうした指導者による授業説明により、学生はこれから観察する授業の概観をイメージすることができるものと思われる。授業の概要をイメージして授業を観察するのとなしなくては実践的授業力の形成に差が出るものと思われる。

### ② 学習指導案

学習指導案は指導者の授業設計図である。一般に、学習指導案は、指導者のものであり、指導目標をた

てて、その目標を計画的、意図的に達成するために、学習活動、学習展開法、指導方法を書き記したものである。しかし、学習指導案は指導者のためのものだけではなく、授業観察者のためのものでもある。授業観察者が授業説明聞いたり、実際の授業を観察したりする際に必要なのである。指導者の授業構想や授業展開法を読み取ったり、子どもの思考の流れを生み出す教師の指導方法を理解したりする上で、学習指導案は授業観察者に有機的な機能を持つ。

学習指導案と実際の授業が遊離している意味がない。両者を結び付けて、学習指導案と授業実践を一体化することがこの期の学生には不可欠である。学習指導案と授業実践の一体化を図ることで、学習指導案を観ただけで、授業の姿を彷彿させることのできる教員としての資質能力の基礎を教職希望学生に形成させたいものである。

## 3. 授業観察のリフレクション

### ① 授業者と学生のQ & A

学生がライブで授業観察する際には、授業観察し放しにしては、実践的な授業力の基礎は身に付かないと思われる。授業を観る目の形成過程にある学生にとっては、現場教師にとって常識的・基本的な指導方法であっても、学生には疑問に残ることが多い。こうした疑問を放置して仕舞うと、ごく当たり前の指導方法がごく自然に実践できない教員になりかねない危惧が生まれる。

そこで、授業者である附属教員や公立校教員には、授業観察後、授業者と授業観察した学生との「Q & A」を10分位の短時間ではあるが実施してもらっている。「机間指導で個々の子どもに関わっていたが、遅れがちな子どもにどんな具体的にどんなヒントをだしたのか」「どうしてあの児童を指名したのか」「この学習のレディネスは何なのか」「この授業は今後どのようにして展開されるのか」「この授業ではどんな評価基準を設けていたのか」等、授業を観察した際の率直な学生の質問に授業者に答えてもらうようにしている。リアルタイムで学生の質問に答えることは、実践的指導力の基礎を育成する上で不可欠であると考えられる。

### ② 授業案の再設計

学習指導案と授業実践の一体化を図るためには、学習指導案の再構成を学生に課すようにしている。学生に授業公開する附属教員及び公立校教員には、授業の成否の鍵を握る「学習活動」「指導方法」等を空欄にした学習指導案を作成してもらい、書き込み

方式になっている学習指導案を配布している。

その意図は、授業観察した後、観察した授業を学生があれこれと省察し、観察した授業の改善点を加え、改善を加えた授業のイメージを頭の中に浮かべて、自分なり空欄のある学習指導案に書き込んで完全な学習指導案を作成する。こうして、附属の教員の授業や公立校の教員の授業であっても、これを自分の授業として取り込ませ、実践的な授業力の基礎を育成するようにしている。

#### 4. 「道徳」の模擬授業

学生の実践的指導力を育成するために、模擬授業を取り込んである。模擬授業は、主役である子どもは不在であるが、子どもの代役を学生にしてもらうのが一般的であろう。模擬授業は、基本的な問題解決学習の流れを把握するために有効な戦略と思われる。

教育実習基礎研究における模擬授業の領域は、特設「道徳」にしている。道徳の授業を問題解決型の授業にするために、事前に、次の型で学習展開をすることを知らせ、教材も与えて学生に主体的に学習指導案を作成させるようにしている。

##### <道徳の模擬授業の型>

導入：「生活」

- ・日常生活を振り返って道徳的価値に関する問題点を見つけて課題設定する。

展開：「資料」

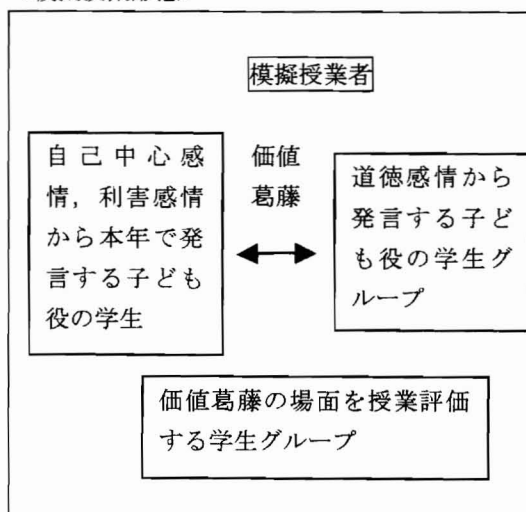
- ・資料を読んで問題点を見つける
- ・価値葛藤する
- ・道徳的価値の発見をする
- ・道徳的価値の深化

終末：「生活」

- ・資料の道徳価値を生活に照らし合わせ、道徳的実践力を培う。

道徳の模擬授業は全体を通して授業することも考えられるが、導入の「課題設定」の場面、「価値葛藤」の場面、終末場面を部分的に取り上げて実践する。特に、授業の成否の鍵を握る「価値葛藤」は人間(子ども)誰もが持つ自己中心感情や利害感情と道徳感情を葛藤させる工夫展開がし易いように模擬授業の形態を工夫している。

##### <模擬授業形態>



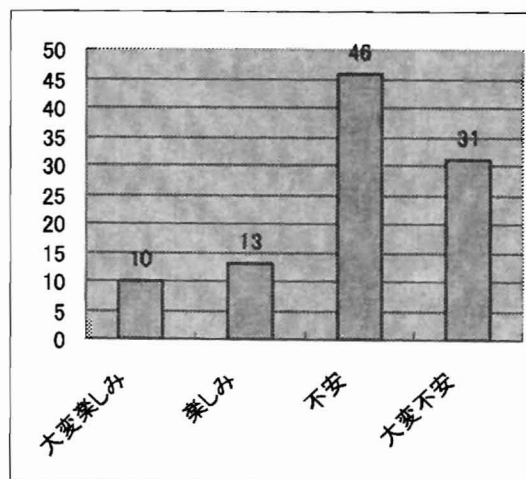
#### IV. 実践的授業力の基礎の形成度

附属教員や公立校教員による実践的な授業観察、模擬授業、現職教員による授業を通して、3年次主免教育実習前の学生に、どの程度の実践的な指導力が形成されているかを調査した。

##### 1. 授業設計力の基礎

3年次主免教育実習に際しては、実習校別オリエンテーションを実施し、配当学年・学級の教員や子どもとの顔合わせ会及び教壇授業計画を立てる。そして主免教育実習1週間前に実施される事前指導では、第1回目の授業(自主立案授業)の教材を手渡すシステムにし、学生が時間的、精神的にゆとりを持って主体的に授業設計できるようにしている。

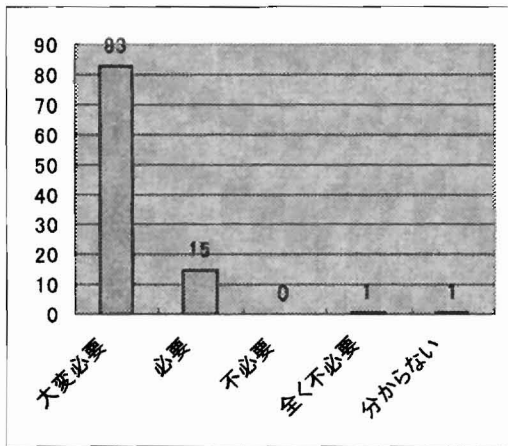
グラフー3 授業設計への関心・意欲



学生の授業設計に関する関心・意欲はグラフー3の通りである。観察授業を通して附属教員や公立校

教員の学習指導案をモデルにして授業設計するのと、自らの教壇授業の授業設計とでは、格段の差があるらしい。自力で授業設計することに不安を抱く学生は多い。「不安」「大変不安」という学生が77%も占めている。「大変楽しみ」「楽しみ」と授業設計に積極的な意欲を見せている学生はわずか23%に過ぎない。したがって、事前指導の段階で第1回目の教壇授業の教材を手渡すことは、授業設計に対する不安解消にも多に意義があると思われる。実際、事前に教材を渡すことの有用性を学生自身が認めていることはグラフ4からも分かる。

グラフ4 事前に教材を渡されることの有用性



## 2. 作業的・体験的活動を重視した実践的授業力の基礎

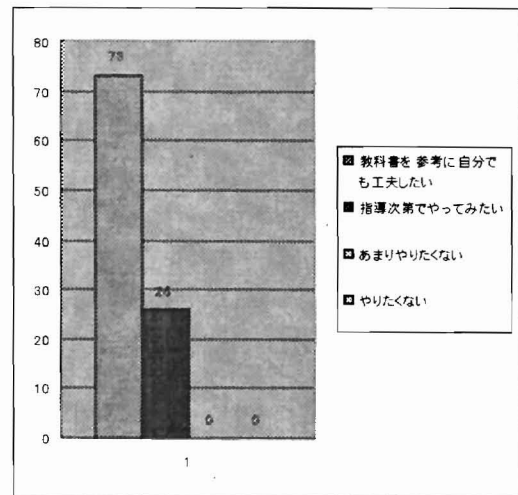
ゆとりの中で「生きる力」の育成を目指す学校教育では、作業的・体験的活動の重視の方向性が示されている。IEAの調査報告(1999)<sup>4)</sup>は、日本の子ども達の学力は高いけれども、学習意欲が低いと指摘した。日本の学校教育は大量の知識・技能を注入する教え込み主義教育をしているという反省の下、平成10年告示の学習指導要領では指導内容を30%、指導時数を14%と従前より大幅に縮減し、学ぶ意欲や学び力等を強調した。特に、算数科等では「数学離れ」「学習意欲の低下」が叫ばれ、その歯止め方策として数量や図形に関する作業的・体験的な「算数的活動」を取り込んだ新しい授業実践を通して、算数の学習意欲を喚起させようとする方向性が打ち出された。

作業的・体験的活動重視の方向性は、算数科に限ったことではない。全ての教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間全ての授業に該当することであ

る。子どもが学ぶということは、教え込み方式のように単に耳を働かせて学習することは、発達段階からして適切ではない。また、子どもは頭の中で念頭操作することも苦手である。体験、作業、実験、操作等を通して、五感を働かせて自ら学び、自ら考えるのが子どもの学習スタイルである。

こうした作業的・体験的活動重視の授業実践への学生の意欲は、グラフ5の通りである。

グラフ5 作業的・体験的活動重視の授業実践への関心・意欲



作業的体験的活動を取り込んだ授業実践を「教科書を参考に自分でも工夫してみたい」という学生(73%)は、作業的・体験的重視の授業実践の基礎の形成に意欲的で、しかも期待が持てる。しかしながら、現場教員の指導次第により作業的・体験的学習を取り込んでもよいという学生は、作業的・体験的学習に消極的であると思われる。理由を聞くと、学生が一番心配しているのは、「作業的・体験的活動を取り込む方が望ましいとは思う。しかしながら、子どもが活動に熱中すればするほど授業の收拾がつかなくなる」と危惧されるからだという。作業的・体験的活動重視の授業実践には、授業を管理するマネジメント能力を身に付けさせることも確かに不可欠であることが分かる。一般に、授業実践力とクラスマネジメント力を個々別々に捉えて論議されることが多い。作業的・体験的活動を通して子どもの主体的な学びを培うためには、授業実践する中で、教科等の授業力の基礎と授業管理するマネジメント力の基礎の両者を同時に育成させることが、今や不可欠になってきていると考える。

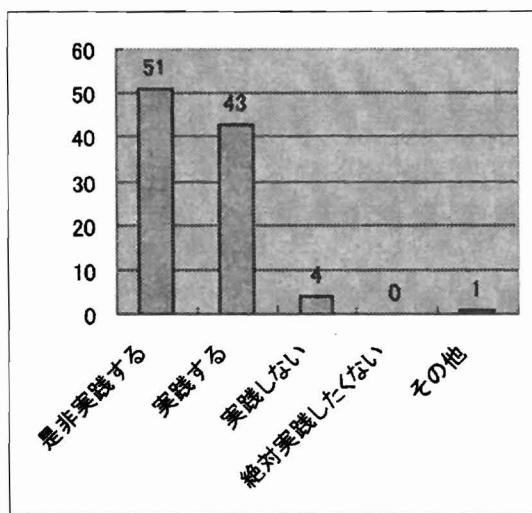


### 3. 多面的な見方や考え方を重視した授業実践力の基礎

高度に複雑化、多様化する社会にあつて、社会の変化に主体的に対応する力を授業の中で育成することが大切である。平成10年告示の現行の学習指導要領では、社会の変化に主体的に対応する力を育成する方策として、多面的な見方や考え方を重視する方向を打ち出している。

従来の授業においては、一般に答えがただ一通りに一意決定するような教え込み方式が多く見受けられた。こうした画一的な授業展開では、複雑化、多様化する社会に変化主体的に対応できる力を授業で育成していないという反省から、多様な見方や考え方を推奨する方向性が打ち出されたものとする。

グラフー6 多面的な見方や考え方を生かした授業実践への関心・意欲



実際の授業の中における子どもの問いに対するものの見方や考え方は、個性的で、多様である。現在求められている個に応じる授業実践を行う観点からも、こうした子どもの多面的な見方や考え方を取り上げ、これを生かすようにすることが大切である。

多面的な見方や考え方を生かした授業実践を「是非実践する(51%)」「実践する(43%)」と回答した学生は、合計94%であった。多面的な見方や考え方を伸ばす授業実践へ意欲的な学生が多いことは望ましいことである。他方、わずか4%であるが、「実践しない」と応えた学生がいる。こうした学生には、教師の都合のよい子どもの反応だけを取り上げて、一問一答式で終わる授業展開は子どもにとって魅力に欠け、学習意欲が低下するので警鐘を鳴ら

したい。しかも、子どもの個性的な学び、多様な見方や考え方の芽を摘みかねないのである。

PISA 報告(2003)<sup>5)</sup>では、日本の子どもの「読解力」は国際比較において14位と成績は良好とはとても言えないという実態が明らかになっている。

PISA のいう「読解力」とは、

「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」

と定義されている。

読解力を分析すると、「理解すること」「熟考すること」「利用すること」の3点が要素と考えられる。本を読むことだけで育成できる力とは考えられない。授業の中で、多面的な見方や考え方を取り上げ、コミュニケーションさせる中で、友達の多面的な見方や考え方を理解し、それぞれの考えを比較検討し、よりよい考えを自分の中へ取り込んで行くようにすることで、「読解力」や「コミュニケーション能力」も同時に育成することができると考えられる。多様な考え方を取り上げ生かす授業実践は、単に多面的な見方や考え方を伸ばすだけに終わらない。他の能力も同時に伸ばすことにもなるということ意識することが大切であるとする。

### 4. つまづきや誤答を生かした授業実践力の基礎

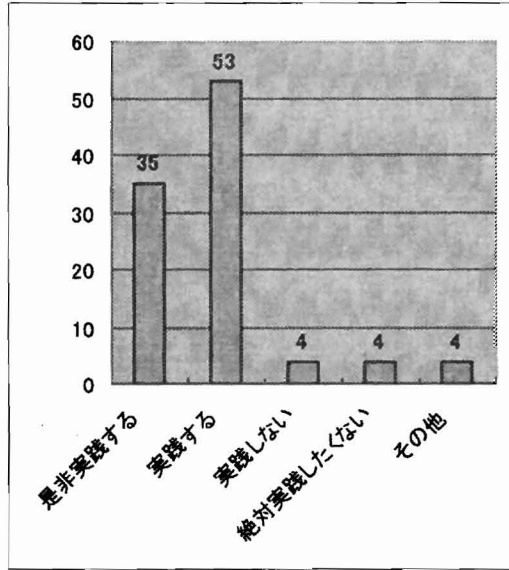
一般に、教育実習生の授業は、学習指導案に書かれた理想的な反応をしているかどうかを机間指導中に見つけておき、これを模範解答として黒板に取り上げて皆に知らしめて終わるということが多い。このような授業の型を「教え込みの授業」「注入主義の授業」という。つまづきや誤答を生かす授業は、子どもにとっては次のようなメリットが考えられる。

<学習者の側に立つ誤答やつまづきを取り上げるよさ>

- ・ 誤答を取り上げて正答と比較することで、どこが間違っていたのかその原因や根拠が明確になり、正確な認知を形成できる。
- ・ つまづきを取り上げることで、レディネスが何で既習事項や既習経験との関連が図られ学習のストリーが明確になり、学習意欲が湧く。

「つまづき」や「誤答」を生かした授業実践をしたいという学生の様相は次のグラフー7の通りである。

グラフー7 「つまずき」や「誤答」を取り上げた授業実践への関心・意欲



「是非実践する（35%）」「実践する（53%）」で、合計88%の学生が「つまずき」や「誤答」を生かした授業実践への意欲を示している。「実践しない」「分からない」という学生は、「つまずき」や「誤答」にどのように対応したらよいのか分からないからだと正直にいう。

「つまずき」や「誤答」を取り上げて授業実践をすることは、ジョン・ブルンスフォード等のいう「教師の学習」<sup>6)</sup>がある。養成段階にある学生にとって教師になるための成長として、次のような価値があると考える。

＜「つまずき」や「誤答」を取り上げて授業実践することの教育実習生の意義＞

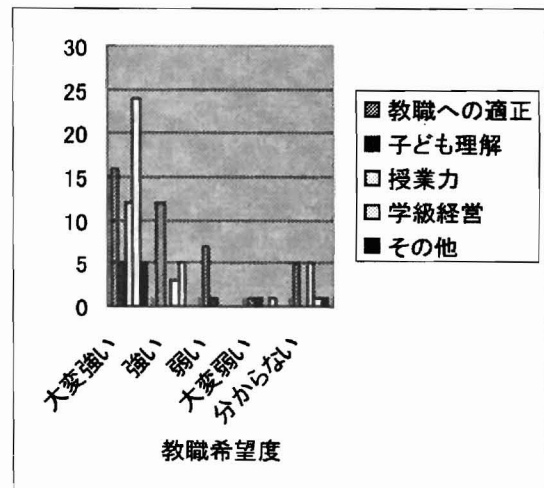
- ① 「つまずき」や「誤答」を知ることで、子どもの思考の様相や実態を把握することができる。
- ② 学習が成立するための基礎・基本（既習事項、既有経験、学習ストラテジー）が何かを子どもから学ぶことができる。
- ③ 教科のカリキュラム（指導の系統性）の重要性を実感的に認知することができる。
- ④ 「つまずき」や「誤答」の多い授業を通して、個に応じた授業実践の必要性を必然的、実感的に学ぶことができる。
- ⑤ つまずきや「誤答」の取り上げ方を熟考し授業実践を通して、授業構成力（授業のコーディネート力）を培うことができる。

## V. 今後の課題と展望

養成段階においては、実践的指導力の基礎を育成することが求められている。「実践的指導力」や実践的指導力の「基礎」とは何かも、明確な定義はされていない。そのため、「基礎」を教科の専門的理論や教職の専門的理論に置く人もいる。しかしながら、こうした「基礎」の捉え方は、従前と同様、教育理論と実践が遊離してしまい兼ねない。教育理論と実践の融合を如何に図るかが成否の鍵を握っていると思われる。

主免教育実習の事前指導として岡山大学では「教育実習基礎研究」を開講している。主免教育実習の最大の重点を、附属学校の特色から勘案して、授業実践力の基礎を身に付けることに置いている。教育実習基礎研究では、主免教育実習のフィールドである学校現場に出かけ授業観察する機会を設け、座学中心の学部授業の工夫改善を図っている。

グラフー8 学生の「主免教育実習」の意義



グラフー8の通り、学生にとっての主免教育実習の意義は、「教職への適正（41%）」「学級経営力（31%）」「授業力（20%）」の順に意義を見出している。この点で、主免教育実習で授業実習に重点を置く学部・附属教員と学生とは認知のズレがあると思われる。確かに学生のいう通り、自分が教職に向いているかどうかは、1、2年次と違って主免教育実習のように、長期的に学校現場を体験してみないことには、教職に向いているかどうかを把握することは難しい。教職の適正は総論であり、各論については、学級経営、教科指導、生徒指導、生活指導等が大きな支障を生じることなく実践できるかどうか



やってみないことには分からない。

学級経営力も身に付けさせたいところであるが、わずか4週間の教育実習では、何も身に付かない。附属教員の取り組みを日常的に観察して学級経営に関する臨床知を学ぶ以外にはないと思われる。

今後の課題としては、附属での主免教育実習を通して、どんな授業実践力の基礎を、どの程度身に付けて学部にかえてきたかを調査研究してみたい。4年次協力校実習校のリフレクションで、現場教師から、「岡山大学教育学部の学生は実践的な授業力の基礎を身に付けた学生が多い」という声をたくさん聞く。単なる印象ではなく、附属主免実習でどんな授業実践の工夫を行って、実践的指導力の基礎を身に付けてきたのかを分析してみたいと考えている。

#### 引用・参考文献

- 1) 文部省告示, 小学校学習指導要領, 付学校教育法施行規則, 平成10年12月。
- 2) 教育職員養成審議会, 「新たな時代に向けた教員

養成の改善方策について」, 第1次答申, 平成9年7月28日。

- 3) 日本教育大学協会教育実習共同研究プロジェクト, 「教育実習・介護等の体験に関する意識調査報告書」, II 事前・事後指導の調査結果, 2003.
- 4) 国立教育政策研究所, 数学教育・理科教育の国際比較, 第3回国際数学・理科教育調査の第2段階調査報告書,
- 5) OECD PISA, OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) 2003年調査国際結果の要約, 2. 読解力, 科学的リテラシー及び問題解決能力の結果, (1) 読解力の結果, 2005.
- 6) ジョン・ブランスフォード, アン・ブラウン, ロドニー・クッキング編著, 森敏昭・秋田喜代美監訳, 「授業を変える, How People Learn, 認知心理学のさらなる挑戦, 教師の学習。教師の成長を支援する」, 北大路書房, 2002.

---

Title: Pre-teaching for the Student-Teachers of the Third Year Grade to Establish the Foundation of Teaching Ability to Practical Student-Teaching —focusing on inquiry of consciousness on post-effect of the lecture of “Fundamental Study of Student-Teaching” —

Toyoo KUROSAKI (Faculty of Education Okayama University)

#### Abstract:

Creating of school peculiarity with its subjectiveness and Independency is strongly pursued with the trend of recommendation of so called new open-styled school models today. According to this stream of tendency mentioned above, student-teaching is more and more required to foster the bases of practical teaching adaptable to everyday classroom scenes. In this report, we are to analyze and consider our third year grade student-teachers' consciousness about their basic teaching ability which they get acquired through the lecture “Fundamental Study of Student-teaching “. In the lecture, “Fundamental Study of Student-teaching”, practical teaching is mainly focused and ,at the same time, to establish a view on teaching itself by watching of the teaching scenes dealt at the attached and other cooperative schools is also stressed ,having hope of their student-teaching go well.

Keywords : practical teaching, practical lecturing, fundamental study of student-teaching, observation of teaching , view on teaching

---